

## 浮かび上がる「もう一つの東アジア世界」

山本 博之 京都大学地域研究統合情報センター准教授／マレーシア映画文化研究会

『マジック&ロス』に人物は何人登場するのだろうか。ベルボーイ、キキ、コッピ、そして他にも観光客らしき人々が何人が姿を見せるが、どれが実体でどれが幻影なのか、考えれば考えるほどわからなくなっていく。

キキとコッピの二人はどちらも存在するのだろうか。それとも、実は一人で、それがベルボーイの目には二人いると見えているだけなのだろうか。もしかしたら、はじめから二人とも存在せず、今日も宿泊客がなかったベルボーイが彫像を眺めてありもしない女性客の姿を妄想しているだけなのかもしれない。いや、幻影はベルボーイの方かもしれない。このベルボーイは実は門の精のようなもので、だから観客に門番の男として見えているのかもしれない。

### 多様な解釈を語り合わずにはいられない作品の力

おそらく、これらの問いに唯一の正解はないのだろう。『マジック&ロス』は、観る人によって異なる物語が立ち上がり、そのいずれもが成り立つ作品なのだ。そうだとすれば、唯一の正解を求めるのではなく、自分がそこにどんな物語を見出し、どうしてそのような物語だと思ったのかを考えてみた方がずっとおもしろい。鑑賞後、「どう思ったのか」だけでなく「どうしてそう思ったのか」を語り合いたくなってしまうのが『マジック&ロス』という作品の持つ不思議な力だ。そんな語り合いの輪に入れていただけるよう、私なりの『マジック&ロス』の物語を少し紹介してみたい。

### 東洋世界における死後の魂のリゾート地？

キキとコッピを乗せた船が島に到着する。島は森が深く、見る限り建物はホテルが一つあるだけだ。この島は東洋世界の魂のリゾート地のようなものではないか。死後、魂になった人々がこの島にやってくる。



島には学校もバーもビーチもあり、子どもも大人も家族連れもそれぞれ落ち着く場所がある。この島に来る魂が増えているためか、収容施設を増やす工事も進んでいる。

船でこの島にやってくるのは死んだばかりの魂だ。船を下りて、島内の行く先が決まっている魂はそこに向かう。キキとコッピが泊まったホテルは、落ち着き先が決まっていない「わけあり」の魂がまず身を置くところなのだろう。

#### 二人なのか一人なのか、入れ替わりかシンクロか

キキとコッピははじめ別々にチェックインするが、あとから同じ部屋に入る。ということは、二人いると見えているけれど魂としては一人分なのだろうか。途中で二人の持ち物や髪型や言葉が入れ替わるが、ただ入れ替わっているのではない。出会ったばかりの二人はビール瓶の持ち方が違っていたが、バーで飲んだときは瓶の持ち方が同じになっていた。単に入れ替わったのではなく、シンクロして一人になっていくようだ。

二人が入れ替わるきっかけは滝や瓶の音だが、入れ替わる原因を

作ったのは化粧品ではないだろうか。このホテルが「あの世」で落ち着き先が決まっていないう魂が一時的に滞在する場所だとすれば、落ち着き先が決まらずに「この世」に逆戻りする、つまり「生き返る」魂もあるはずだ。それを防いで魂を「あの世」に定着させるための仕掛けが、「あの世」のものを食べたり飲んだりして体内に採り込むことなのだろう。ホテルの男が二人を食事やバーに誘ったのはそのためだ。そして、あのホテルで「化粧品」と呼ばれているのは、化粧品の姿をしているが、その正体は体内に採り込むと「あの世」に定着する働きを持った何かではないか。ホテルの男がコッピに「化粧品を使ったか」と尋ねたのは、キキに化粧品を飲ませたかという意味だったのだ。

#### 行き場の定まらない魂の遍歴物語

コッピと一緒にいるあいだ、キキはおばあさんからもらったネックレスを失っていた。もしかしたら、ネックレスにはおばあさんの魂が宿っていて、それがコッピの姿を借りて現れたのだろうか。おばあさんなのにキキと似たような年恰好で現れたのは、島に来る魂のうち20歳前後の魂が「わけあり」としてこのホテルに泊まるため、それを迎える魂が同じ年恰好になるからかもしれない。東アジア世界では、18歳から21歳までが子どもから大人になる変わり目の時期と見られている。それよりも幼いと子どもとして扱われるし、それよりも年をとっていれば一人ひとりの名前を持つ大人として扱われる。20歳前後の時期は、頭も身体ももう子どもではないけれど、世間的にはまだ何者でもない存在だ。「この世」でも正体がはっきりしない存在で、だからその魂は「あの世」でも行き場所が定まらず、まずはホテルに一時滞在することになる。

20歳前後の魂の落ち着き先があやふやだとしたら、その状態を利用して働きかけようと待ち構えている魂もいるだろう。島では、外部世界との連絡手段は船と電話だけだった。だから電話がかかってくれば、それは「この世」からということになる。キキが受けた電話はコッピのもので、コッピが「この世」からかけてきた、つまりコッピは「この

世」で生き返った(あるいは生まれ変わった)ということだ。キキは電話でコッピ(つまりキキのおばあさん)から事の顛末を知らされたのではない。そうして行き場を失ったキキの魂はホテルに留まり、同じような境遇にあるほかの魂たちとともに次の若い魂が来るのを待つことになる。ホテルに置かれていた彫像は、そんな魂たちが形を変えた姿なのかもしれない。

#### ミステリアスな雰囲気潜む「中国抜きの東アジア」の姿

『マジック&ロス』では、キキとコッピが向かう先々で木の幹や廃墟の壁に漢字が浮き上がっており、何ともミステリアスな雰囲気を醸し出している。キキとコッピは日本と韓国から来た魂なので、一つひとつの漢字の意味はわかっても全体で何が書かれているかは読み取れない。わかるけれど、わからない。この感覚は、自分が確かに中華世界の一員でありながら、決して中華世界にしっかり属してはいないという感覚と重なってくる。

この世界は、全体として中華文化の内にあるが、中華文化の色は濃くない。それは、キキとコッピが日本と韓国の出身なので中華文化と距離があることに加えて、監督のリム・カーワイが中華系マレーシア人、つまり中華文化を継承しつつも中華文化圏の外にいる存在で、そのため中華文化と少し距離があるからではないだろうか。

『マジック&ロス』の世界は、東アジア世界から大胆に中華文化の要素を抜いて骨抜きにしたものではないだろうか。現実には東アジア世界を中国抜きに考えることはできないけれど、いつも中国を中心に据えるのではなく、日韓や在外中華の各要素が手を取り合うことで、中華色が薄まった「もう一つの東アジア世界」が浮かび上がるかもしれない。『マジック&ロス』は、ミステリアスな雰囲気の中にそんな大胆な発想が秘められた物語としても読めるのではないだろうか。